

「平成24年度 上北沢区民センター文化祭」で 上北沢桜並木会議が展示した内容

『江戸後期から明治を中心に‘旧 上北沢村を見る’
この名前の村は賑わっていた！！』

1. 年表

2. 現 上北沢／桜上水（平成 22 年版）と旧 上北沢村（明治 13 年「フランス式彩色地図」）

3. 旧 上北沢村中心付近の想定図

- ① 鈴木左内邸（現 区立緑丘中学校、早苗保育園 他）
- ② 榎本平蔵邸
- ③ 鈴木左内家 長屋門
- ④ 牡丹園「凝香園」
- ⑤ 幽谿山観音寺密蔵院
- ⑥ 勝利八幡神社
- ⑦ 左内弁天社

4. 「遊歴雑記」[左内家の牡丹] の道筋

- ・「鈴木左内邸 庭園の図」
- ・「榎本平蔵邸 藤棚の図」
- ・「密蔵院の図」
- ・〈浮世絵〉三十六花撰「北沢 牡丹」立祥 筆

江戸後期から明治を中心に

‘旧 上北沢村を見る’

この名前の村は賑わっていた !!

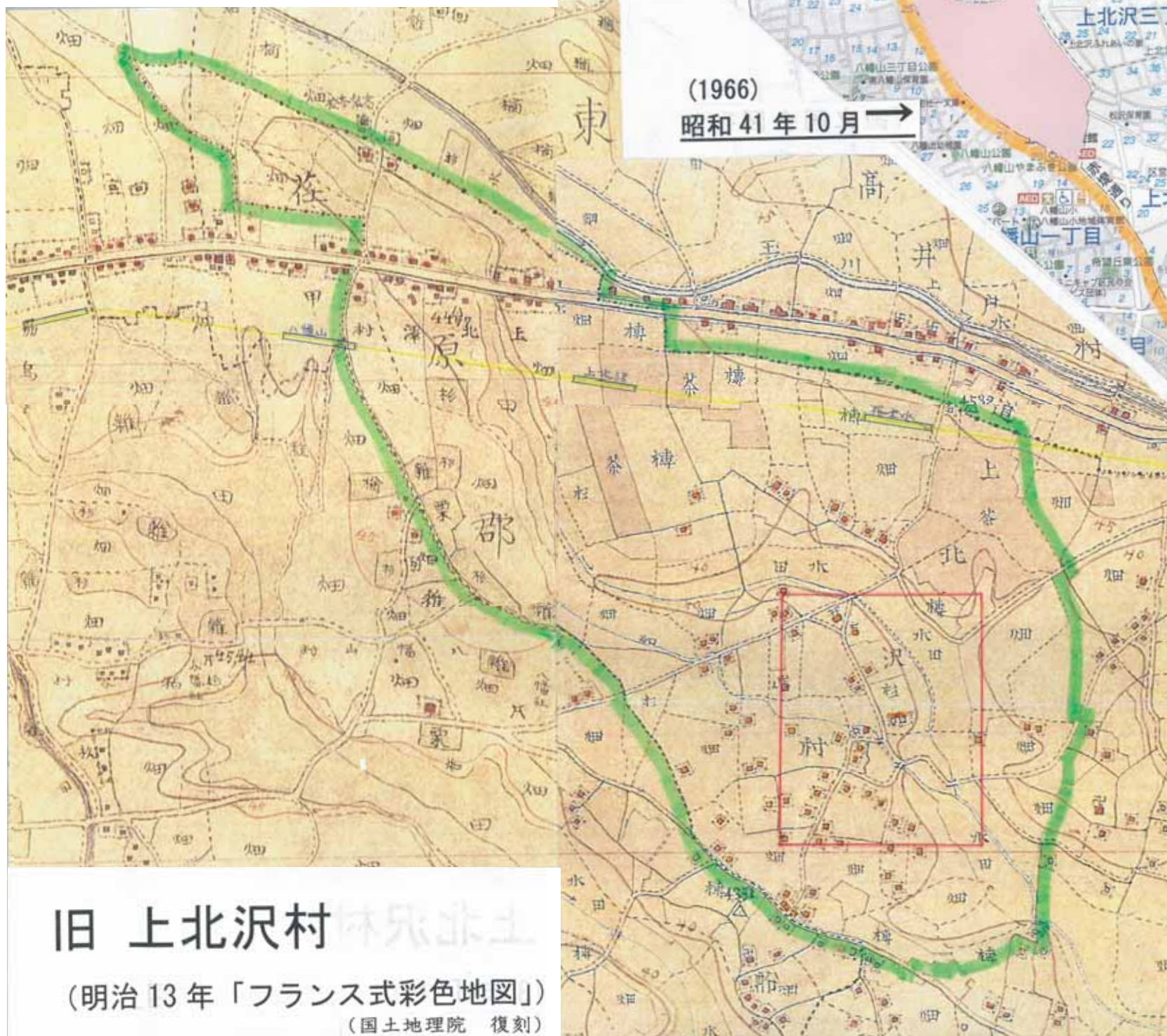
旧荏原郡上北沢村略年史

時代	和暦	西暦	
先土器			遺物
縄文			早期：遺構 ・ 中~後期：住居址
弥生			住居址
古墳			住居址
(飛鳥)			
平安	万寿 3	1026	勝利八幡神社 創建。(藤原道長の世)
(鎌倉)			
南北朝	延文 1	1356	吉良治家 陸奥管領を退き、世田谷領主となる。(以後天正18年まで234年間)
室町	天文 3	1534	上北沢住の吉良家家臣川村、広沢大友氏 ら多くの家が疫病に倒れる。
	永禄 5	1562	鈴木家の祖、後北条氏の家臣鈴木新八郎重継が 上北沢に入る。
安土 /桃山	天正 8	1580	榎本家の祖 榎本河内守重泰の子 氏重が 下野国から上北沢に入る。
	" 18	1590	豊臣秀吉により、後北条氏が滅び、関東が徳川氏の領有となり、上北沢は伊丹氏の所領となる。(以後48年間)
	慶長 3	1598	観音堂を修築し、頼慶和尚を住職として密蔵院が創建された。(秀吉没)
江戸	" 8	1603	江戸幕府 開府。
	寛永 17	1640	旗本 中根氏の知行地となる。 (以後、元禄元年(1688)まで60年間)
	万治 1	1658	玉川上水の完成から4年後に、「上北沢分水」が完成。北沢川の水量が増し、農業生産が急増する。
	正徳 3	1714	上北沢村は増上寺領となり、村高は六代家宣公、七代家継公の御霊屋料となる。(明治維新まで以後150年余続く)
	享保 3	1718	將軍家の御鷹場の再編成が行われ上北沢村は中野筋に入る。これで、高井戸宿の助郷が免除されている。
(化政期)	1800 1830		村、大いに賑わう。市中から、幕臣、文人墨客、見物、参詣客多く訪れ、中通りに茶店が並び、料理屋も建つ。

時代	和暦	西暦	
近代	明治 1	1868	明治維新
		4 1871	寺社領制の廃止で、増上寺領を離れて一般の村となる。
		12 1879	連合戸長制により松原 赤堤 上北沢の各村が連合し、戸長に鈴木左内がつき、邸内に役場が置かれた。
		22 1889	町村制により、上北沢 赤堤 松原の三村を併せて 松沢村となる。
大正	4 1915		京王電気軌道開通「北沢駅」開業。
	8 1919		巢鴨病院が移転、松沢病院となる。
昭和	7 1932		東京市域拡張により、松沢村は、世田谷町、駒沢町、玉川村の3町村と合わせて世田谷区となった。
	41 1966		行政区分改変により街は「上北沢」と「桜上水」に二分され更に、「上北沢」が烏山支所に、「桜上水」が北沢支所に分断された。

現 上北沢/桜上水

(平成 22 年版「世田谷区全図」)



旧 上北沢村

(明治 13 年「フランス式彩色地図」)

(国土地理院 復刻)



3 . 旧 上北沢村中心付近の想定図

① 鈴木左内邸（現 区立緑丘中学校、早苗保育園 他）

記録によると、左内邸の母屋は、長屋門北側に式台付き玄関があり、左側に仏間、右へ延びる当主居室、その北側に並行して先代居室、建物中央に茶の間、その北側には、広間、土間などが続いていたと云う。更に裏庭には、土蔵、鶏小屋、その脇に、今も緑丘中学校庭の中央にそびえるケヤキ(a)が立って居り、その奥は、竹林と杉林に覆われていた。

また、庭園の池の横の築山に植わっていた松(b)は、今、グラウンド南側フェンスの内側に残る。

慶安年代(1650頃)江戸城改修の際に、お堀の土手に植えられた黒松の兄弟とされる六本の松(c)は、現在、早苗保育園の垣際に大きく枝を伸ばしている。

[世田谷区誌研究会編「せたかい」第五十二号]より



(a) 左内邸のケヤキ



(b) 築山の松



(c) 江戸城の兄弟松

② 榎本平蔵邸

榎本家は鈴木左内家と力を合わせて領主などとの折衝や神社仏閣の保護等、村の発展に努めてこられたが、その中で榎本平蔵家は早くから、北沢用水を使って水車業を稼業とし、その様子は「遊歴雑記」の“左内家の牡丹”の文中に述べられ、また紀行文「北澤詣で」の挿絵にも“藤棚”と共に描かれている。

また、幕末期の当主平蔵（重能？）は[穀物粉類販売方法]の訴訟問題の解決に、近在村落の水車稼業六十一名の総代として大いに尽力したことが記録に残されている。



③ 鈴木左内家 長屋門

長屋門は、江戸時代の武家屋敷の表門の形式の一つで、その大きさや形は、身分や石高によって厳しく決められていた。

一方これとは別に、身分は武士ではないが、村役人や豪農の家に構えられた長屋門があり、世田谷区ではこの形のものが全部で五棟あったことがわかっている。そのうち現存するのが、上町ボロ市通りにある大場家の門と、次太夫堀公園に移築されている門の二棟、既にこわされてしまったものが左内家を含めて三棟ある。鈴木左内家の長屋門は戦時中米軍の空襲には焼け残ったが、昭和23年緑丘中学校建設時に解体されてしまった。

門の形を残すものとしては、昭和初期に作られた絵葉書の写真一枚だけになっているが、ここに示したのは、その写真を元々に彩色したもの。

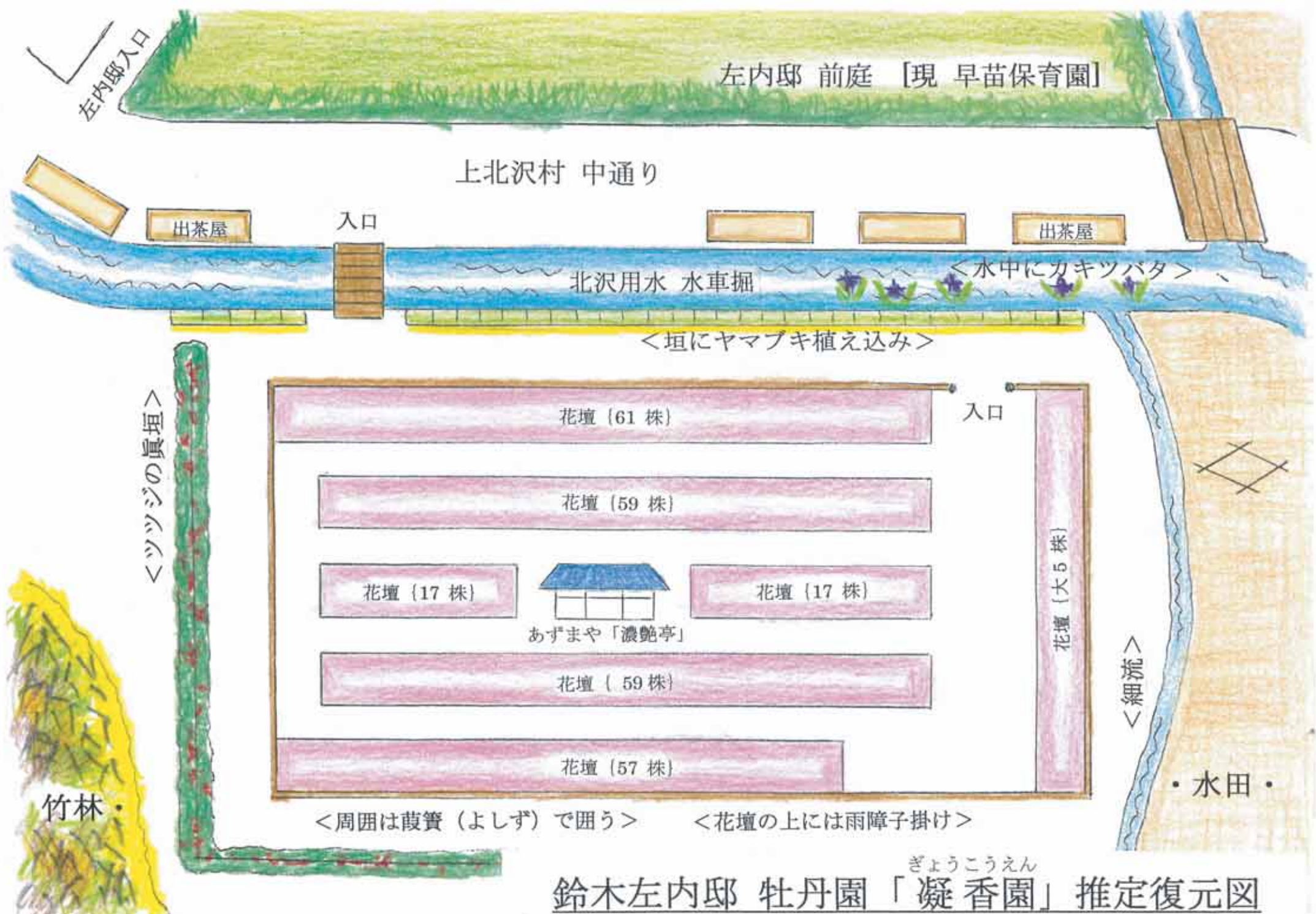
④ 牡丹園「凝香園」

鈴木左内仲賢が、文化・文政期(1804~1829)に自宅に開設した牡丹園。珍しいものを含めてたくさんの種類を集め、手入れ良く育てていたため、江戸市中の文人や画家の間で評判になり、見物客を多く集めた。

この頃、上北沢では牡丹だけでなく、密蔵院のしだれ桜、榎本平蔵家の藤、また、榎本喜太郎家の霧島ツツジなどで”花の村”の評判が高まり、密蔵院へのお参りと合わせて“北沢詣で”は江戸の流行になっていたようだ。

この賑わいは幕末まで続き、明治に入ってからも多く^の著名人が牡丹園を訪れたとされている。

下の図は、文化~天保年間(1804~43)に刊行された行楽案内書“江戸近郊みちしるべ”から書き写して復元した「凝香園」の見取り図。



⑤ 幽谿山観音寺密蔵院

このお寺は、榎本氏の故地の下野国都賀から来た頼慶和尚を住職として、慶長三年(1598)に創建された、鈴木左内家、榎本家などの菩提寺。

本尊の不動尊や、観音堂の百体観音は、正月、彼岸、盆などにだけお参りできるが、普段は、参道わきの古い地蔵尊、墓地入口に並ぶ六地蔵や、六観音と勢至菩薩の七体の石像などをゆっくりと拝むことができる。

六地蔵は、六道輪廻の信仰による普通の六地蔵とは意味が違い、その形を借りて鈴木家や縁のあった六人の人の菩提を弔うために作られたもので、六地蔵としては区内最古の石像。 寛文十年(1670)~作。

又、六観音は左から、千手・聖・馬頭・十一面・如意輪・准胝の観音で右端に勢至菩薩が並び、いずれも子孫の無事繁栄を願っている。
世田谷区内では六観音の作例はこれだけ。 享保三年(1718)作。



六地蔵



六観音と勢至菩薩



地蔵菩薩「万治三年」



旧本殿
(覆屋)

⑥ 勝利八幡神社

この神社は旧上北沢村の村社。創建は平安時代半ばの万寿三年(1026)と伝えられる。この前年の万寿二年 清少納言が、翌年の万寿四年に太政大臣藤原道長が、紫式部もこの前後に没したという古い時代のこと。

[世田谷区指定有形文化財] 「八幡神社 旧本殿」<区内最古の神殿建築>

唐破風の拝殿屋根、柱上部の飾り彫刻、正面の七段の階段、左右の高欄付き切目縁、などの細工や、臺股など各種の木組み、それに、白い胡粉の上に施した彩色、其の他すべてにわたって、小さいながら室町期の香りを残した本格的社殿建築として高く評価されている。

この本殿は天明八年(1788)に作られて以来、昭和四十三年(1968)の改築まで左上の写真のように、築山の上の覆屋の中に祀られていた。



旧本殿

大瓶束



柱頭の木鼻と斗拱



側面高欄と縁



唐破風彫刻



正面



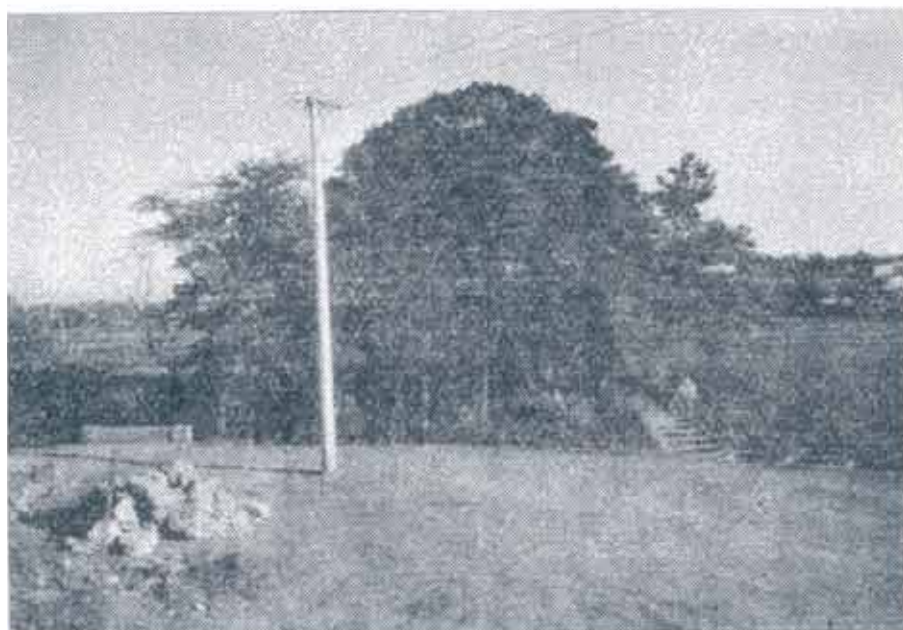
⑦ 左内弁天社

「新編武蔵国風土記稿」によると、この社は宝暦年代(1750)頃に本郷六郎左衛門が勧請して作られたものが起源と考えられる。

又、ここにある「遊歴雑記」(左内家の牡丹)には現在の弁天社付近に「益田の池弁財天」があったことが記されている。

それ以後の資料としては、昭和33年世田谷区刊行の「世田谷区史料 第一集」に、弁天の森を北側から撮影した写真が掲載されている。その画面の左側には弁天橋の欄干が、右には水路らしきものが見られるが、社の存在は確認できない。ただこの写真の説明が「上北沢弁天社」となっているので、写真撮影時に社はあったものと考えられる。

現在の「左内弁天社」は、昭和54年に地元有志と鈴木家により復元されたものだが、この時点で旧社殿はすでに失われていた。



上北沢弁天社



現在の左内弁天社

(「世田谷区史料 第一集」昭和33年刊より)



「遊歴雑記」[左内家の牡丹]の道筋

筆者は、小石川 小日向町から上北沢まで片道四里(16km)をどのように歩いたのか、地図の上でその道筋をたどってみる。

下の紀行文と対比してご覧ください。



地図:(陸地測量部) 明治42年測量・大正6年修正・1/50000 図

・拡大複写・約1/22500。 0 1 Km

三拾四 名主左内家の牡丹

武蔵国荏原郡瀬田がや領上北沢村の名主鈴木左内と言う者が、牡丹数株を……その評判がさまざまなので今年こそ見物に行つて見ようかと、(文政十年(1827)旧曆)四月十五日朝、食事を済ますとすぐに「小石川小日向の自宅を」出かけて……二時過ぎにその牡丹園に着いた。その道筋は、四谷信濃殿町辻番「現慶応大学病院前」から右へ入り、御焔硝蔵御用屋敷「現千駄ヶ谷駅付近」、を過ぎ、千壽院、隠田の畑、を通り……

〈紀行文〉「遊歴雑記」津田大浄(十方庵)撰

[名主左内家の牡丹]は、筆者が文政十年(1827)旧曆四月十五日に上北沢を訪れた折りの、道筋や村の様子などを的確に描写した貴重な史料。 [国立公文書館内閣文庫 蔵]

やがて道玄坂を上がりきつて右へ入り、駒場村御用屋敷「現駒場高校付近」の前を過ぎ、おおよそ二十余町(2km余)で北沢の淡島明神「現森厳寺」についた。……ここから左の道をぶらぶら行くと、数十町(5kmほど)で赤月「赤堤」村……これから又数十町で上北沢村の通りに出た。右へ行くと四谷通りの大還「甲州街道」なので、左へ行くと、左側に益田の池弁才天「現左内弁天」というのがあった。一株の松が弁天の島に生えていて……由緒ある祠と思われる。これから数十歩で左内の屋敷の外周りの堀につくが、小さな溝に咲いているかきつばたがすがすがしく、左内の家の門前に来ると、住まいは右側にあり、牡丹は通りをへだてて左側にある。

花壇の上には雨障子をかけ、四方は葭簀で囲み、東西十三間(23m)、南北六間(11m)、その中に一の花壇から第七の花壇まで……

又牡丹畑の前の通りを西へ行くと四谷筋「甲州街道」に出ると云う。この往来の道端には、よしず囲いの茶屋が出ていて、そば切り、団子、田楽屋たちが懸命に商いをしている。南の方の高台には目立つように食べ物屋が建っていて、立派な身分の人たちが休んでいる姿もある。途中の道筋では見物の人もめつたに居なかつたが、ここへ来てみると見物の男女が群れ集まっている様子はまるで盛り場のようで、それぞれの茶店や料理屋で人の入っていない店はない。……

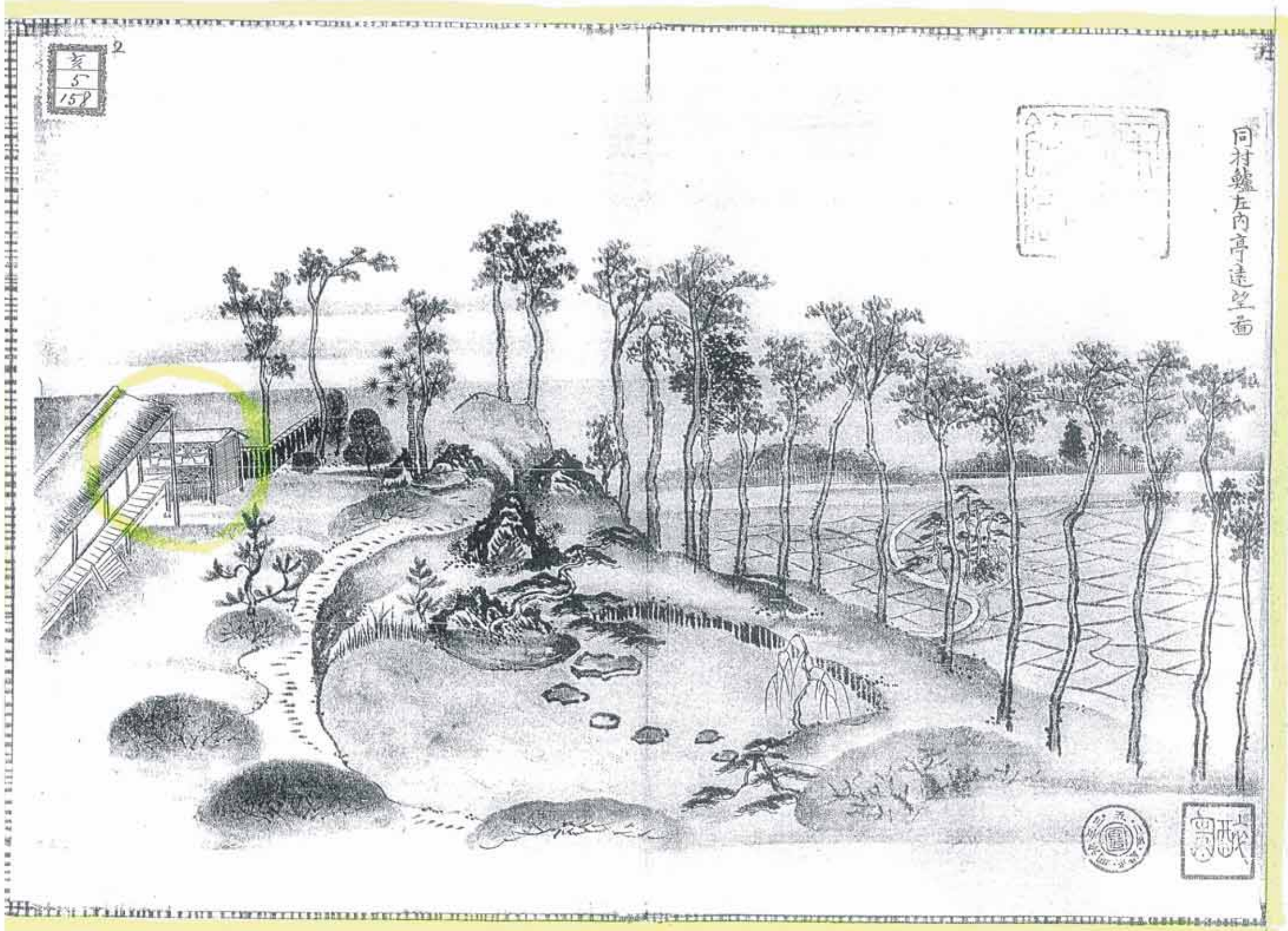
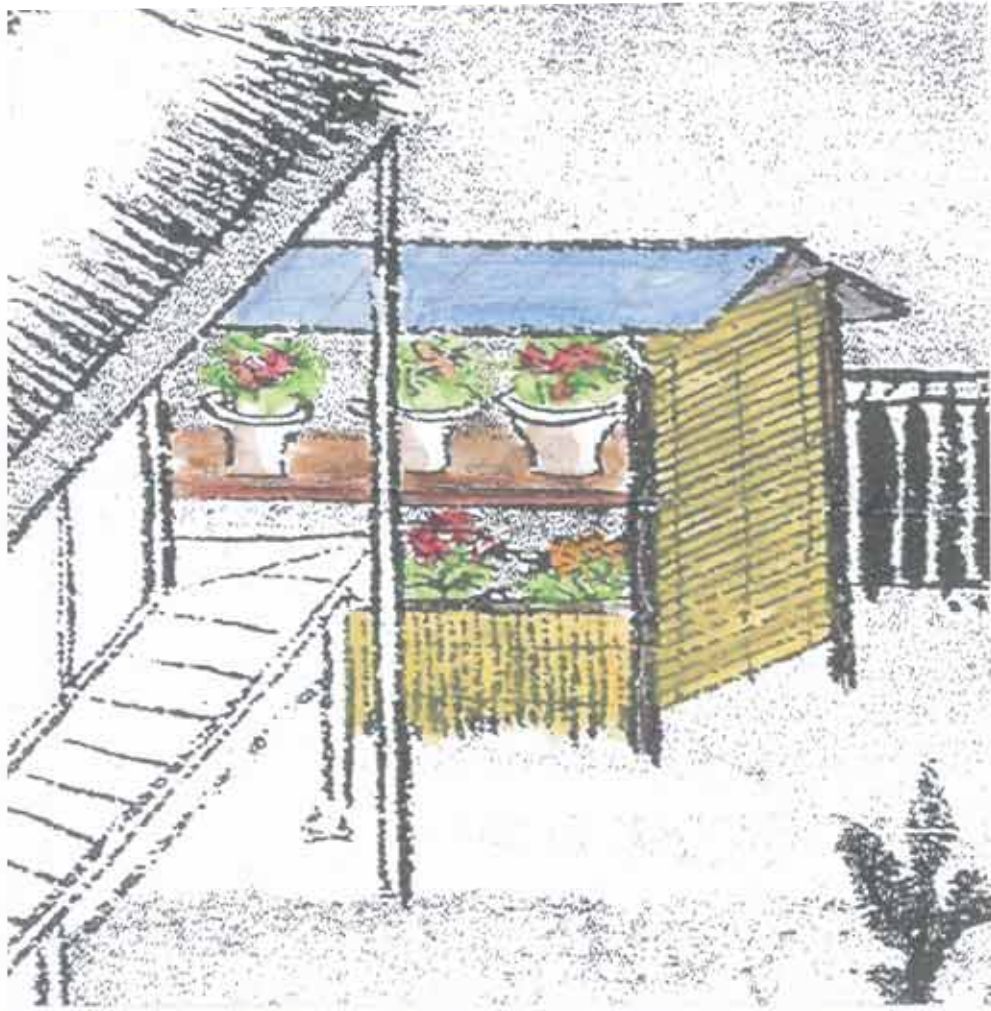
なおまた、西隣りにある水車屋の藤棚は、長さ二十一間(38m)、幅二間(3.6m)、花の長さは四尺(1.2m)余りあるという。……

更に見たいものは、この近くの密蔵院の彼岸桜で、木の高さ約六丈(18m)東西に枝が繁つて十二間(22m)南北十間(18m)で幹周り一丈(3m)という。来年二月に散策して書き記そう。……(以下省略)

(読下し文責 野口)

注（原画は美しく彩色してあります）

「鈴木左内邸 庭園の図」（牡丹花壇 部分拡大 彩色）



「榎本平蔵邸 藤棚の図」(右下に水車の書き込み)

武州荏原郡上北澤村

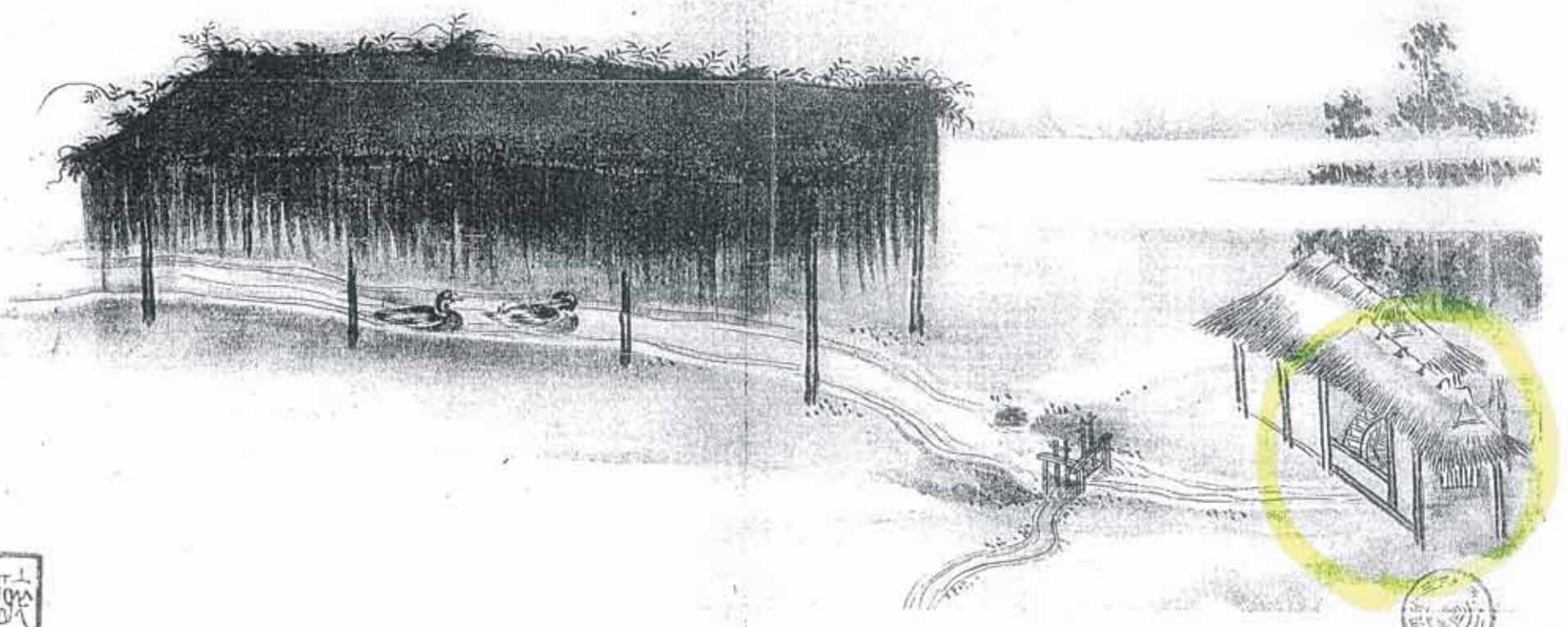
某家 藤架図



同村某家藤架畵



亥
158

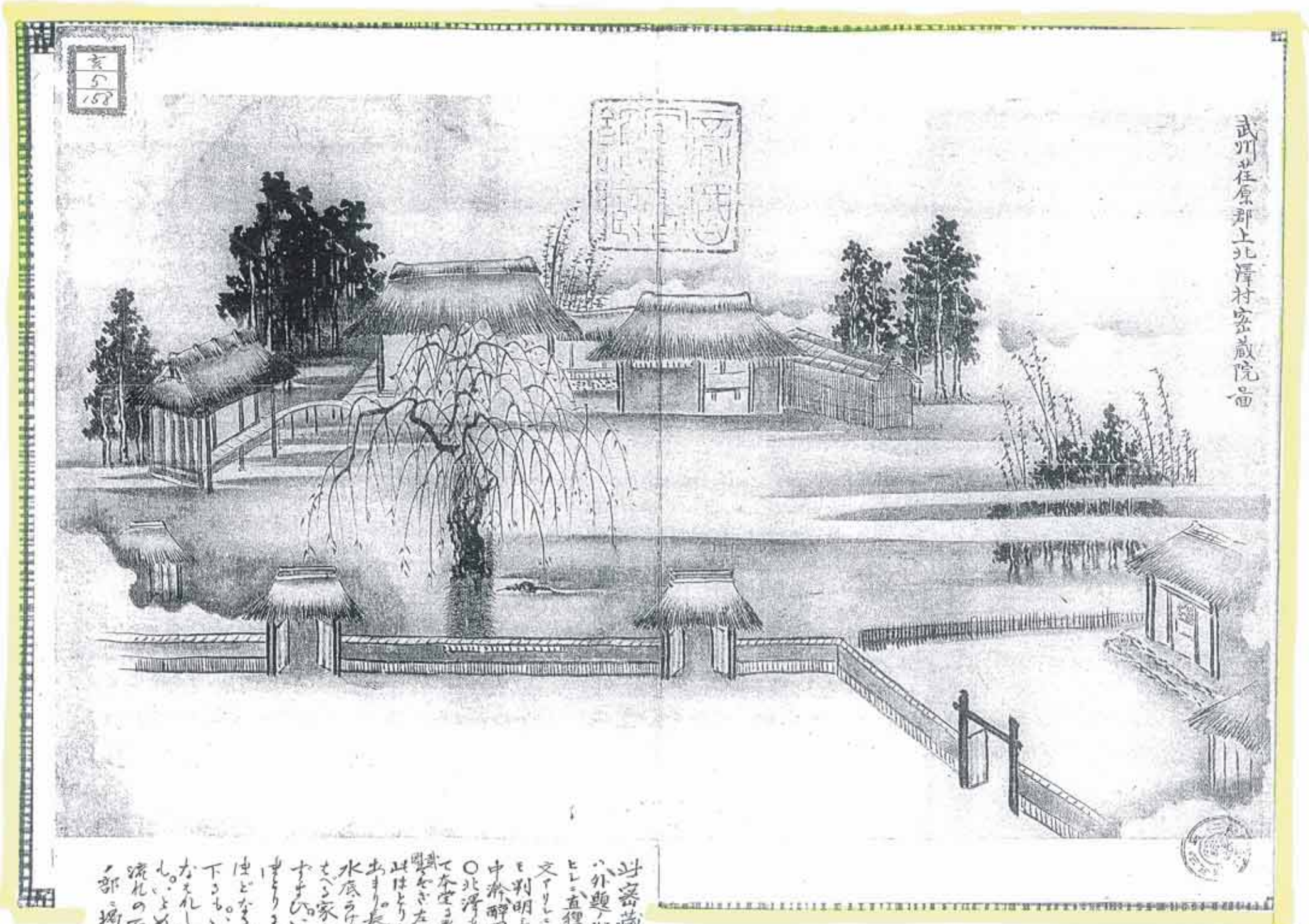


< 紀行文挿絵 >

「北澤まうで」橋本常彦撰

文化年間（1804~17）に筆者が、幕府御家人で国学者の屋代弘賢に誘われて上北沢密蔵院に参詣した紀行文から、挿絵だけを抜き出したもの。 [国立国会図書館 蔵]

「密蔵院の図」



此密蔵院
 外題如
 ヒレ直徑
 文アリ
 判明
 中津野
 ○北澤ま
 て本堂を
 此はより
 出まらば
 水底より
 土家
 十
 下
 ながれし
 流れの石
 部

< 浮世絵 > 三十六花撰「北沢牡丹」立祥筆

立祥は初代広重の弟子で、初代の没後 二代広重を襲名した。三十六花撰は慶応二年(1866)に制作した代表作。

[神奈川県立歴史博物館 蔵]



注(此のプリントはカラーコピーのため、色調は正確ではありません)